

「衆知」について

副主任研究員 大江 弘

「設立当初にはなかった衆知」

このシリーズ、今回は「衆知」を取り上げたいと思います。衆知は、一般的に「衆人の知恵。多人数の知恵」という意味で用いられます。しかし松下幸之助が述べている衆知は、それほど単純ではありません。たとえば、「新しい人間観の提唱」では、「まさに衆知こそ、自然の理法をひろく共同生活の上に具現せしめ、人間の天命を發揮させる最大の力である」とあります。明らかに、衆知という言葉には、一般的な理解以上に重要な深い意義が込められているといえるでしょう。それでは、いつから松下は、衆知をどのように重要な意味を持つ言葉として使うようになったのでしょうか。

昭和二十一年十一月三日、PHP研究所の前身である、経営経済研究所の開所式で松下は、何としても繁栄に至る道を見出したいと訴えるとともに、本研究所の仕事は、そこに至る道を偉大な先人から学びとり、それをかみ砕いて人々に教え、啓蒙することである、と語っています。ここには、偉人や賢人といった優れた先人の知恵を集めるといふ考え方はあっても、大衆の知恵を集めるといふ考え方はありません。大衆は、知恵の源泉ではなく、啓蒙すべき対象とされています。おそらく松下も、PHP研究所の設立当初には、いまだ一般的な理解を超えず、ことさら衆知を重要なものとは考えていなかったのでしょう。

「衆知」の初出は業務日誌

衆知が言葉として最初に登場するのは、設立から約三週間後、社名をPHP研究所に改称することに決定した翌日である十一月二十九日の朝会に関する記録の上です。そこには、「朝會ニ於テ從來八具体策ヲ研究所ニ於テ樹立シテカラ賛同者ヲ求メルト言フ建前ヲトツテ來タケレドモ今後八先ズ賛

同者ヲ求メ賛同者ノ衆智ヲ集メテ具体策ヲ樹立スル建前ヲトル方向ニ進ム事ニ決定ス」(業務日誌 昭和二十一年九月、昭和二十二年八月)とあります。ここでの衆知が、松下自身の言葉かどうかは、残念ながら特定できません。しかし、少なくともこの頃には、すでに松下の中において、衆知がある程度重要なものと位置づけられていたのは確かでしょう。

十二月三日の朝会訓話に関する次の記述は、松下が、衆知を重視するとともに、その考え方をきわめて高く評価していたことを示しています。

「最初我々八我々ノ考ヘヲ中心ニシテ各方面ノ専門家ノ教ヲ受ケ入レソシテ遠ク先哲ノ考ヘヲモトリ入レテ繁榮ヲ作り出サウト考ヘテ居タノデアル。ケレ共此ノ一ヶ月間、更ニドウスルナラバ最モ有効ニ事業ヲ進メ得ルノカト言フ事ヲ真剣ニ考ヘタ結果一段ト進シタ境界地ニ達シタノデアル。ソレハ天地ヲ貫又ク縦ノ線ニ、天地自然ノ理ヲ説カレタ先哲ノ教ヲ受ケ入レルト共ニ、横ニ拡ガル地平線ニ最新ノ學理ヲ研究シテイル人ノ考ヘヤ又大衆ノ眞ノ要望コレヲ總括シテ大衆ノ知慧トモ言ヘヤウガ之ヲモトリ入レルト言フ行キ方デアル」(所長言辭録 昭和二十一年十一月、昭和二十二年六月)

一方、対外的に衆知が用いられたのは、十二月十四日に出上がった「PHP研究とPHP運動」というリーフレットが最初です。そこでは、この研究所においては、天地自然の理を解明された幾多先哲諸聖の所説を導きとし、廣く一般大衆の衆智を取り入れ、更に現代の各方面の有識者の論説を汲んで、所謂天地自然の聲を綜合して現状に適した方策をまとめあげる」とあります。明らかに、経営経済研究所での開所式の話とは異なっています。

さらに、昭和二十一年十二月二十三日と日付の入った論考「再建の道」では、次のように述べています。

「諸君自身が夫々再建を熱望し、そして智能を傾けるならば、その念願と生活態度は、馳て大衆の間に廣まつて、総ての人々の眞摯な意見、即ち衆智が期せずして聚まるに違ひない。此の衆智に耳を傾けると同時に、現代科学の蘊蓄を傾けた學理學説を聞き、更に古くより人類に正しき、幸福な生活をもたらす事を願つて垂教された先哲諸聖の教へをもとり入れ、それら総てを結集し、その中から現代の社會に適合した具体策を組み上げるならば、必ず天地自然の理に適つた再建

への正しい政治の在り方が見出されてやがて、我々の生活社會は逐次繁榮の道をたどる事が出来ると思ふ次第である」この段階までくると、繁榮の実現のためには、衆知はなくてはならないきわめて重要な考え方として位置づけられていることがわかります。事実、これ以降のPHPに関する松下の講演には、衆知を集めることの重要性がしばしば語られるようになっていきます。

「衆知こそ人間最高の知恵」

しかしこれだけでは、衆知についての松下の考え方が、どれほど深まっていたかは何ともいえません。もしかすると、衆知はきわめて重要と考えてはいても、衆知そのものについてはいまだ十分に究めていなかったかもしれませぬ。

一般的な理解以上に重要な深い意義をもった言葉として衆知が明確に説明されるのは、それから約五年後の昭和二十六年九月に発表される「PHPのことはその三八人間の天命」が最初です。

そこでは、「衆知こそは、人間の最高の知恵、すなわち英知であり、いわば神の意志を代弁する知恵」多数知はほんとうの衆知ではない「たとえ大知恵者の知恵であろうと、また愚者の知恵であろうと、すべて同じ条件のもとに、平等に、大は小なりに、小は小なりに、それぞれの持ち味に依りて、吸収され総合されなければならない」など、松下の衆知についての基本的な考え方が明確に語られています。

以上、衆知の淵源を探ってまいりました。おそらく松下にとって衆知は、最初はそれほど重要な言葉ではなかったのでしょう。それは、PHP研究所の設立を経て、多くの人々と議論し、対話を繰り返す中で重要性が認識され、それこそ衆知が集まる中で特別な意義や意味をもつ言葉へと高められていったのではないのでしょうか。もし衆知が、実際にそのように衆知が集まる中で見出され、重要視されるようになったとすれば、何とも面白い話です。